



高校に入ったら、中学までの自分を捨てて理想の自分になるんだと吉田君は決意していた。

なのにクラスの35人中10人が同中という一そもそも同中から進学してきたのが15人だというのにこのクラス分けはどう考えても変だろうと吉田君は毒づいたが一妙なクラス編成の所為で、吉田君の野望は簡単に潰えた。

本人は至極真面目に新しい自分になりきっているのだが、周りの人間が以前と同じように接してくる為、吉田君自身も中学の時と同様の受け答えとなり、結局は何ら変化のないまま入学式&始業式を済ませてしまった。

「ありえねえ」と既に何度か同じぼやきを吉田君は発し、それに対して「確かに変だよな」と毎回同じ返しをする山本も昨年からのクラスメートである。

電車通学で隣の市から通ってくる堀は「いいじゃん、最初から知った顔があると安心じゃん。あたしなんてウチの中学から来てるのも3人だし、残りの2人は男子だしさ。心細くて心細くて…」と全く心細そうな気配を感じさせずに言う。

「心細いやつが入学してすぐに初対面の男子に話しかけるかよ」と吉田君は思ったが、山本は愛想よく「そうだよな。俺らはラッキーだったよ」と能天気なことを言う。調子のイイ奴だ。

窓の外に目を向け今後の自分のあるべき姿について考えた。

マイペースで周りに流されない、しっかり自分を持った自由人になりたかったなあ。吉田君は空を流れていく雲を見ながら既に諦めの境地でそう思った。

吉田君の家はパン屋なので、小さい頃から近所の人にも店に来るお客さんにも愛想良くすることを運命づけられていた。概ね親からの遺伝だったのだろうが…。

その所為で、常に場の空気を読んだり雰囲気壊さないようにしたり揉め事が起きないようにしたりと…何かにつけ気を配る側の人間だった。

だからこそ、学校だけでもマイペースでと言うか自分勝手にしていたかったのだ。とは言え、中学までは所詮近所の人間の集まりなので、自分の思い通りにはならなかった。

元々反抗的な性格ならそんなことはものともしなかったのだろうが、そもそもの性質がそういう風に来ていなかったのだろう。親にも学校にも逆らうことなく愛想のいい「パン屋の吉田君」を知らず知らずに演じていた。

高校になれば、ずっと同じ学校だったヤツとも別れるはずだと吉田君は漫然と考えていた。

北高は吉田君ちの自宅兼店がある商店街を抜けたところにある。ある意味、近所の範囲内だ。

しかし、この界限ではなかなかの進学校なので、吉田君の中学から来るのは毎年5人居るか居ないかだった。その程度の数ならクラスがバラけさえすれば大丈夫なはずだった。

それが今年に限ってと言うか、吉田君の代に笹野というカリスマが居た為に周囲が感化されて他の学年よりかなり成績が良かった。だから北高へ進学した人数も15人といつもより増えた。

北高に来たのは例年より10人増えただけだが、実際北高に受かった生徒は30人以上居た。しかし、上位陣は成績優秀過ぎて北高を蹴ってまで私立の有名進学校へ軒並み行ってしまった。これも笹野がそこへ特待生として進んだ影響だと吉田君は思っている。

その為かどの為か、本当になりたい自分になろう計画が初っ端から崩れたのは笹野の所為だと吉田君はちょっぴり恨んでいた。結局のところ、やつあたりでしかないのだが。

高校が始まって最初の週は、ほとんど授業がなくオリエンテーションばかりだった。公立とは言え一応進学校だし、学校が始まり次第テストだの午後まで授業でビッシリだのと思っていた吉田君は少し拍子抜けしていた。

高校でもバスケ部に入るつもりだったので、始業式のあったその日に体育館に顔を出してみたものの卓球部とバドミントン部が体育館を半面ずつ使っておりバスケ部もバレー一部も居なかった。

ふと運動場の方を見ると屋外コートでバレー一部が準備体操をしていた。

もしかしたらバスケ部もそちらに居るのではと思い、運動場へ移動していたところで伊藤に会った。

伊藤は市内の別の中学のバスケ部だったから試合で何度か会ったことがある。

「吉田あ。お久！」

伊藤が気軽に声をかけてきた。

そんなに親しかった記憶はないのだが、吉田君はつい習い性で「おう。久しぶり」と笑顔で答えていた。この愛想のよさこそ本当の吉田君だと思われるのだが、本人は気付いていない。

「やっぱ、高校でもバスケ続ける？」

伊藤と一緒に運動場の方へ向かいながら尋ねると伊藤も吉田君と同じことを思ってたらしく

「体育館に居ないよな。屋外の日なのかな。交代制？」

と応じてくる。伊藤もバスケ部に入ろうと思っているようだ。

吉田君も伊藤も身長は男子高校生の平均くらいで(…と言っても2人とも平均的な高校生の身長を知っている訳でも何でもないのだが)お互い背は高くないけれどバスケは好きという点で似ているのかもしれない。

伊藤が立ち止まって正門の方を指さす。

「あれっぽくない？」

あれというのは正門からランニングで入ってきた一団のことである。深紅のジャージの上下を着た集団が縦長の列を作って入ってきたのだ。

運動部と言ってもその種目によって個々の特徴がある。

同じようにラケットを使うテニスとバドミントンでも、ラケットケースやスポーツバッグなど持ち物は似ているのだが部員達の雰囲気やらウェアやらは全く違う。屋外でプレイすることの多いテニス部の人間の方が全体的に陽に焼けていると言うこと以外にも何か醸し出すものが違うのである。

それと同じように同じ球技でもバスケ部とバレー一部も雰囲気が異なる。体型も微妙に違うし…。

だからこそ、今入ってきたのがバスケ部だと2人とも思った訳だ。中学からバスケをやっている2人にとってはバスケ部の部員の方がバレー一部の者達よりも垢抜けていると思っていた。

そして、どこがどうという訳でもないのに自分たちの先輩の方がカッコイイとかも思っている

のだ。それはバレー部とて同じかもしれないが。

「ウエアいいね。ユニフォームも赤だったっけ？」

伊藤はまたも吉田君と同じことを考えていたようだ。

「ああ。確か市の体育館に試合見に行ったことあるけど、濃いめの赤だったと思う」

吉田君は「・・・と思う」とか言ってみたものの実はその時の試合のことははっきりと覚えていた。同じ市内にあるバスケの強い私立の高校と試合をしていたのだが、平均身長が10センチは低であろう北高のバスケ部のメンバー5人が巧みな頭脳プレーで相手を圧倒していたのだ。最初のピリオドまでは…。その後は体力的に続かなかったのか、やられ放題だった。それでもあの10分の5人はカッコよかった。

伊藤と並んで運動場の隅にあるコートでのバスケ部の練習を見ながら吉田君は去年見た試合を思い出していた。

最初の10分の切れのいいパスワーク、頭腦的なパス回し。だが、彼らに足りなかったのは体力ではなかった。レギュラー以外にベンチに居たのは3人。既に3年が引退している時期だから仕方がないのかもしれないが、それでもメンツが少な過ぎる。そして全員が吉田君の身長と同じか若干背が高い程度だった。

今もシュート練習を始めた人数は8人。減ってもいないが増えてもいない。

「どうする？」

伊藤が顔をコートに向けたまま聞いてきた。

「入る。明日入部届け出す」

そう言って吉田君はコートから離れた。やっぱり、アイツをバスケ部に誘おう。吉田君は先週から店にバイトに来ている山野井のことを考えていた。

山野井は吉田君の中学に中三の2学期という、通常では考えられない時期に引越してきた。その所為だけでなく、山野井は目立っていた。

最初廊下で見かけた時、「デカイ」と思わず声に出たくらいだ。恐らく、身長はその時既に190あったのではないか。そんな背の高いヤツに今まで気付かないはずないと思ってクラスの女子に聞いてみた。大抵のことは女子の方が多く情報を持っている。

「ああ、山野井君でしょ。山野井聡君って8組に転校してきたニューフェイス！なんか突然こっちに引越して来たらしいよ。親の実家がこっちにあるから地元に戻って来たとかそんな感じの話だったかな。笹野君に気に入られてるって噂なんだって。凄いよね……」

そのまま延々とそいつが知ってる情報を全部教えてくれたのだが、つい2、3日前に転校してきたばかりらしいのに1組にまでこれだけ知られてるってすげーなって思った。

その上笹野に気に入られてるって……どんなヤツなんだ。吉田君は山野井のことが少しだけ気になった。でも、すぐに忘れた。山野井が気になったのも一瞬だけだ。背の高い山野井が居てたらバスケ部ももう少し県大会で残れたんじゃないかとしらっと思っただけ。部活は夏の大会で負けた時点で引退したし、受験までの日数はカウントダウンされてるし、吉田君は自分のことで手いっぱいだった。

だから、4月になってすぐに山野井が店のイトインのテーブルのところで自分の父親と話しているのを見てビックリした。

「これがウチの息子。圭、明日からバイトに来る山野井君だ」

話している理由はこれでわかった。高校の部活は朝練あると思うから店そんなに手伝えないと高校の合格発表の日に吉田君が言ったので店の入り口のところに『バイト募集』の貼り紙をしていたがその日まで誰も来なかった。そしてやっと来たのが山野井だった。

「山野井。ウチの高校、バイト禁止じゃなかった？」

山野井にだけ聞こえるように小声で言ってみた。

「ああ、知ってる。だから先に学校に聞きに行ったんだ。それで親と一緒に校長や教頭にも会ったよ。早くも呼び出し食らったみたいな感じ」

山野井は高校生になったばかりとは思えない落ち着いた口調で答えた。

「あのさ。俺のこと知ってる？」

吉田君は少し弱気になって聞いてみた。

「知ってるよ。1組に居た吉田。女子が『吉田君はバスケ部なのにイラストとかめっちゃウマイ』ってよく話題にしてた。文化祭の時も美術部のところに飾ってただろ」

吉田君はイラストのことを言われて顔が赤くなるのがわかった。

「あ、あ、あれは趣味だから・・・本気はバスケだから」

吉田君が慌てて言うと、山野井はゆったりとした感じで笑った。

「そっか、趣味か。でもいい絵だよ」

その時は山野井が単にイラストを褒めてくれただけだと思っていた。

学校から帰ると、吉田君はすぐに店の方へ向かった。山野井のシフトを把握している訳ではないので居るかどうかわからなかったが……。

居た。山野井は吉田君の父と2人でピザを作っていた。

「お帰り」

山野井が吉田君に気付いて声をかけた。

「ただいま。今日、バイト？」

バイトだから居るに決まっているのに……そんな質問をしたことを吉田君は恥ずかしく思ったが、「違うけど、ピザの作り方を習いたかったから」と山野井が笑顔で答えた。学校で見る時より爽やか度がアップしてるような気がするけど……錯覚か？

「あとは焼くだけだから、圭んここで待ってな」

吉田君の父がそう言ったので、吉田君は山野井を連れて自室に戻った。……台所にあった昨日のパンと飲み物を持って。

「山野井。バスケ部に入らない？」

吉田君は部屋に入るとすぐに勧誘した。自分だってまだバスケ部に入っていないのに。

「無理。他にもバイト入れてるんだ。それにもう文芸部とイラスト部に兼部で入ったから無理」

……無理と2回も言われてしまった。

「それよか、お前。イラスト部入れよ」

逆に勧誘されてしまった。

「絵、巧いだろ。描くの好きなんじゃないのか？」

吉田君は動揺した。山野井は吉田君をイラストで認識していた風だったから。

「あれは……趣味だから」

前にも似たようなことを言ったよなあと思いながら吉田君が答えると

「ああ、本気はバスケなんだろ？でも、イラ部なら放課後じゃなくても出来るし、文化祭の作品出してくれるだけでいいからさ。それならいいだろ？」

山野井は見た目の爽やかさと違い、やや強引な感じで吉田君に詰め寄った。

お互いに座っていたが、その状態ですら山野井の方が威圧感がある。吉田君は引き気味になりながら「でも……」と言いつつ、なんとか逃げようとした。

「大丈夫だよ。吉田なら兼部でも十分やっていけるさ。明日、部長に言っとくな」

そう言いながら山野井は言葉とは裏腹に邪気のない笑顔を向ける。

「負けた」吉田君はそう思った。こんなイケメンにこんないい笑顔を向けられて断れる訳がない。吉田君は山野井をバスケ部へ勧誘することに失敗した上に運動部入ろうっていう自分が兼部する羽目になったことにガックリきていた。新しい自分になれる気がしなかった。



翌日の休み時間に吉田君は山野井に呼ばれて廊下に出た。

北高は3限と4限の間と4限と5限の間が20分休憩となっていて、大抵は3限の後弁当を食べる。そして4限の後の昼休みには外でサッカーをしたり学食へ行ってカレーやラーメンを食べたりと血気盛んなのである。

新入生はまだオリエンテーション期間なので誰も弁当など持ってきていないが、上級生は既に午後の授業も始まっているし新入生にも4限はあるので20分休みはしっかり存在している。

山野井が入口から声を掛けてきた。

「吉田あ。入部届け持ってきたからサインして」

入口付近の女子がザワザワしている。吉田君の方を見て「早く行けよ」オーラを出しているように見えるが、吉田君は上手く反応できなかった。

そんな吉田君にお構いなしに山野井は入口から離れ廊下から外を見おろしていた。吉田君がぼんやりとそれを見ていると堀が声をかけてきた。

「早く行かないと、女子に囲まれるよ」

吉田君はハッとした。確かに突き刺さるような視線を感じる。早く行かねば……。吉田君は急いで廊下に出た。

山野井もなぜか陰のある視線で下を見ている。中庭に何かある？

「山野井。入部届って親の承諾いるんじゃないか？」

山野井の方へ近づきながら話しかけた。山野井は視線を上げ、「大丈夫」とでも言うように入部届をヒラヒラさせた。

父親の名前が既に書いてあった。昨日の内にもらったのか？

「吉田さんは大賛成してくれたよ」

吉田君はがっくりと肩を落とした。山野井は全方向に受けがいいんじゃないだろうか？

「で、中庭に何かあんの？」

吉田君は山野井と並んで下を見た。北高は1年生が2階なので……因みに2年が3階、3年が3階で年を取るごとに遅刻の確率が増えて行く……中庭がよく見える。

山野井はビクッとして窓際から離れようとした。

中庭には石畳になった小さな広場があって、文化祭の時などはそこに野外ステージなどが出来る。その周りをぽつぽつとベンチがあるのだが、そのひとつに男子が3人居て、2人が仲良く並んでベンチに座り1人がベンチの前の石畳の部分に直に座っていた。ベンチも所詮石（ブロック？）なので冷たくて固いという点ではどちらも同じである。

「知り合い？」と聞きながら吉田君は「あっ」と声をあげた。

「伊藤？」

吉田君の声が自分で思っていた以上に大きかったようで、開いた窓から声が聴こえたのか下の3人が吉田君の方を振り仰いだ。

伊藤と並んで座っていた少年が眩しそうに2階を見上げている。

「なんか・・・美少年？」

吉田君は思わず呟いた。山野井に腕を掴まれた。

「痛い。何なに？痛いって」

山野井はむすっとした顔で吉田君の腕を離した。

下から伊藤が呑気に声をかけてくる。

「吉田に山野井？どういう組み合わせ？」

「どうでもいい」

拗ねた感じで山野井はそう答えて窓を閉めた。

吉田君は山野井のことをそんなに知っている訳ではなかったが、普段大人びた感じがするだけに今の山野井の行動がいつもと違って可愛く思えた。

「サインしてやるから、機嫌直せよ」

吉田君がそう言うと、更にむっとした顔をしたもののすぐに考え直したのか入部届とペンを吉田君に渡してきた。

「いい絵、描こうな」

吉田君が名前を書き終わるのを見て山野井がそう言った。こいつも描くのが好きなんだと吉田君は思った。

吉田君が担任から入部届の用紙をもらい、父親の承諾をもらい、それをバスケ部の顧問に提出出来たのは、イラスト部の入部届にサインしてから3日後だった。単に吉田君の段取りが悪かっただけなのだが、既に即日入部していた伊藤達から出遅れていた。

「バスケ部の部活紹介は月曜に体育館でやるらしいぜ」  
伊藤が少しでも早く入部してことで得た情報を教えてくれる。

H Rの時に来週から午後は部活紹介になると担任の赤松から聞いていたが、どの部がその曜日かまでは言っていなかった。

北高は文武両道を謳っており部活動にも力を入れていて、来週からようやく授業が始まるのかと思いきや…まあ午前中は授業が始まるのだが…週の前半の午後は運動部、文化部そして同好会(北高では人数が5人以下だと部になれず、予算もないらしい)の紹介に時間を使うらしい。なんともおおらかな学校である。

「先輩達、ゴール下空けてもらってダンク見せるって」  
今度は伊藤と同中で今も同じクラスだという瀬田が教えてくれた。

そう言えば、こいつもあの時中庭に居たような…と吉田君が瀬田の顔をじっと見ていると、瀬田の方から聞いてきた。

「あっ、お前って山野井に無理矢理イラ部入れられてた吉田？」

なんなんだ、その表現は…間違っちゃいないけど。吉田君はそう思いながらげんりとした。

「あの時、中庭に3人で居た？」

吉田君が聞き返すと、伊藤と瀬田が2人して詰め寄ってきた。

「篠原のことは、気にしないでやってくれ」

「あいつを見つけたことは忘れて」

吉田君は2人が必死になっているのが不思議だった。

「どうして？お前らのクラスメートなんだろう？まさかハブってるの？」

そう言いながらも吉田君には2人があの美少年(?)を仲間外れにしようとしているようには思えなかったが。

「いや、篠原は俺らの中学から来たヤツからは超大事にされてるから」

「なんて言うか、他のクラスのヤツらから隠したいって言うか」

何を言ってんだか？と吉田君は思ったが、2人が余りにも真剣なのでつい真面目に答えてしまった。

「わかったよ。忘れればいいの？でも体育とかで一緒になるよ」

吉田君は5組で2人は6組だが、北高では体育とか選択系の授業では隣合った2組合同ですが多いのだ。

「そんな時はそんな時だよな」

「俺達は全力で篠原を守るさ」

またも2人は口々に言う。

吉田君はちらっと見た（見下ろした？）だけでほとんど顔を覚えていない篠原という少年について思いを馳せた。

しばらくしてハッと気付いて2人に告げた。

「お前らがそうやって騒ぐと余計に気になるよ。その篠原ってヤツのこと」

2人しておおっという顔をして「そうだな」と呟いた。

「よし、騒がずにそっと見守ろう」

「そうだ。名前を出さないようにしなきゃ」

「中庭に出るのは止めた方がいいのか」

「いや、篠原は何気に外も好きだから・・・」

「囲って見えないようにすればいいじゃん」

それから2人が次々と吐き出す台詞を黙って聞きながら、吉田君はさっき以上に篠原少年に興味を持ってしまった。

結局のところ、吉田君はあっさり篠原を見ることが出来た。

月曜の1限が体育だったからだ。吉田君は先週あった委員決めのHRで見事（！）体育委員となった。そのお陰で準備体操の間、正面から篠原を見ることが出来たのだ。

まだ入学したばかりで他所のクラスの面子までは当然把握しきれていない。だから、その日5組の男子の目を一身に集めたのはオーストラリアからの交換留学生のルークだった。金髪碧眼は注目に値するだろう。背も山野井と同じくらいだったので、吉田君は今日までなぜ彼に気付かなかったのだろうかと自分に対してビックリした。

だが、5組の皆がルークのことをちらちら見ている時、吉田君は篠原を見つけていた。

篠原は各組2列で並んでいる6組の列の真ん中辺りでじっとこちらを見ていた。体育委員が何か指示を出すのを待っているのだろうか。

吉田君がぼんやりと篠原を見ていると、横に立っていた伊藤に背中をはたかれた。6組は伊藤が体育委員だった。

「おいおい、早く準備運動の指示出せよ。ストレッチだろ」

伊藤は早く仕事をしろと言わんばかりにせっついたが、部活の時のことを思い出すと伊藤は吉田君が篠原を見るのを阻もうとしてるんじゃないかと思えた。

「じゃあ、ストレッチ始めるま〜す。俺がやるようにやって下さい。笛が鳴ったら腕換えて」  
吉田君はそう言いながら上腕を伸ばすストレッチを始めた。横で伊藤も同じように腕を伸ばしている。

篠原は真面目な性格なのか、ストレッチをしている間中も自分が正しく出来ているかどうかを確認するかのように吉田君の方を見ていた。澄んだ目で見つめ続けられて吉田君は何だか面映ゆい感じがしていた。

何種類かのストレッチを終えた後、次は2人ひと組でやるストレッチの指示をしようとした途端、伊藤が6組の列に戻って行った。

「おいおい。お前が戻ったら俺、誰と組むんだよ。指示出せないじゃん」

吉田君は慌てて伊藤の背中に向かって泣言を言った。伊藤は5組の真ん中あたりに一人で居た沢井に「ちょっと交代して」と言ってとっとと戻っていく。

「なんだよ」と吉田君は小声で拗ねながらも「じゃあ、次は2人ひと組で〜。列の前後の人と組んで下さ〜い」と叫んだ。

伊藤はちゃっかり元々6組の列（勿論、背の順）で篠原と組んでいた。さっき伊藤が声をかけた沢井も元々は吉田君が体育委員として前に行かなければ、吉田君とペアになる相手だった。

2人ひと組で肩を伸ばしながら、「沢井と篠原が組めばよかったんじゃないか」と思った。篠原は別に困っていたようにも見えなかったし、あのまま伊藤が吉田君と模範演技（？）を続けていたら篠原は普通に沢井に声をかけたと思う。

ストレッチが終わる頃ようやく体育教師の浜中がやってきた。吉田君は列の自分の位置に戻りながら篠原の方を見た。篠原はもう吉田君の方は見ていない。しっかりと浜中を見つめている

。やっぱ真面目だ、と吉田君は思った。